

ここに来たモノ

登場人物

尾崎 (31) 観光客
山下 (27) 会社員
女将 (60)
住職 (63)
女 (声のみ)

1

食事処を兼ねている宿がある。
一階が食堂、二階が宿屋だ。
下手袖と舞台の境に引き戸がある。
そのすぐ隣に帳場がある。
上手袖と舞台の境は暖簾がかけてあり、そのまま厨房に繋がっている。
舞台奥には扉。そこから客室に行くことができる。
舞台中央に二つの長机とそれを取り囲むように椅子が4つずつ置かれている。
九月上旬の平日、午後5時過ぎ。
食堂には誰もいない。

キャリーバッグを引いた山下が戸を開けて現れる。

山下 (舞台中央まで歩いてから呼ぶ) すみません！ 従業員の方はいらっしゃいますか！
女将 (声のみ) はい！ ただいまー！

すると、女将が上手から現れる。

女将 ごめんなさいね。遅くなっちゃって。
山下 いえ。そこまで待っておりませんので、お気になさらないでください。
女将 あらそう。ところでお客さん、入り口の張り紙は見た？
山下 はい。確認しました。ただ、宿はやっているとのことだったので。

女将 ああ宿泊のお客様だったのね。だったら、こっちに来てちょうだい。
山下 承知致しました。

二人、帳場に移動する。

女将 (宿帳を取り出して) これに記帳をお願いね。
山下 こちらですね。承知致しました。

山下は宿帳に記入を始める。

山下 (手を止めて女将に) すみません。
女将 どうしたの？
山下 質問よろしいですか？
女将 何か分からないことでもあった？
山下 住所は、県からですか？
女将 ええもちろん。県からでお願い。
山下 承知致しました。(再度書き始める)

間

山下 (手を止めて) すみません。またよろしいですか。
女将 え、ええ。どうぞ。
山下 連絡先は、家電ですか？ 携帯ですか？ それとも会社ですか？
女将 ……お客さんの中で、一番連絡がつくと思う所を書いてちょうだい。
山下 承知致しました。

間

山下 (手を止めて) すいません。
女将 (腹ただしく) ああもう！ 今度はどこ……
山下 記入、完了致しました。
女将 終わった？ ああ終わったのね。じゃあ、それをこっちにちょうだい。
山下 承知致しました。どうぞ、お受け取りください (と女将に帳簿を渡す)。
女将 (帳簿を受け取って) えっと、名前は山下さんで、宿泊は本日から明々後日までの
四泊五日。(顔を上げて) ちょっと待って山下さん。もしかして、お仕事でここに？
山下 はい、その通りです。

女将 あら大変なのね。ならお食事はどうする？
山下 え？ 食事が出るのですか？
女将 今、食事処はお休みなんだけどね。宿泊のお客様にのみ提供するなら負担は少ないだろうってことで、やってるのよ。
山下 なるほど。
女将 それでどうする？ 朝と夕、つけていく？
山下 では、お願いします。
女将 (電卓を取り出して) じゃあ料金に食事代を追加して……はい、お会計はこの金額ね (と電卓を見せる)。
山下 分かりました。……こちらを (とお金を渡す)。
女将 はいどうも。(お金を確認して) 確かに。じゃあこれ。お釣りと部屋の鍵ね。(と部屋の鍵を渡す)
山下 (鍵を受け取って) ありがとうございます。
女将 部屋は奥の (と指指して) その扉を開けたすぐの階段から行けるから。あと、夕食は夜の6時から7時まで、朝食は朝の7時から8時までにここに来て。
山下 承知しました。
女将 あ、そうそう。お風呂は一階の突き当りね。時間の方は……今はあなたしかいないから夜ならいつでもいいわ。でも昼には入らないでちょうだい。掃除するから。
山下 承知しました。
女将 他に聞きたいことはある？
山下 いえ、とくには。他に説明事項がないのであれば、私は一度部屋の方に向かいたいのですが。
女将 そう、分かったわ。少ししたら夕食の時間になるから、早めに降りてきてちょうだいね。
山下 承知しました。では、失礼致します。
女将 はい。短い間、よろしくねえ。

山下は奥の扉に去る。

女将 さてと。

女将は帳簿を閉まって去る。

少しの間後、尾崎が旅行鞆を持って入ってくる。

尾崎 (呼びかける) すいませーん。従業員さんいるー？
女将 (声のみ) はい！ ただいまー！

再び女将が上手から現れる。

女将　ごめんなさいね、遅れちゃって。
尾崎　いえいえ。全然待ってないから大丈夫ですよ。
女将　あらそう。ところでお客さんは、入り口の張り紙は見た？
尾崎　見たよ。宿泊はできるって書いてあったから入って来たけど。
女将　ああ、宿泊の方ね。だったら、こっちに来てちょうだい。

女将と尾崎は帳場に向かう。

女将　（宿帳を渡して）これに記帳をお願いね。
尾崎　分かりました（と帳簿を受け取って記入し始める）。
女将　しかし、今日は珍しい日ね
尾崎　どうかしました？
女将　いやね。さっきも宿泊したいってお客さんが来ていたのよ。
尾崎　へー。僕の場合、このあたりの人に聞いてここまで。このあたりで良い宿屋はありませんかーって。
女将　そうだったの。うれしいわあ。
尾崎　はいこれ（と宿帳を渡す）。
女将　どうも。（受け取って）えっと、名前は尾崎さんで、今日から二泊三日。
尾崎さん、あなたも仕事で？
尾崎　いや、違うけど……あなたもって？
女将　ああ。山下さん、っていうのがさっき受付した人なんだけど、仕事で来たって言うてたから、尾崎さんもかなと思って。
尾崎　なるほどねえ。僕はもっぱら観光だよ。明日から一日中この辺りを巡るつもり。
女将　お食事はどうする？
尾崎　え！　出るの？　でも、時間も時間だし、準備できてないでしょ。
女将　簡単なものなら出せるわよ？　それで食べるの？　食べないの？
尾崎　食べれるなら、是非ともお願いしたいなあ。
女将　じゃあ料金、追加しておくわね。……はいこれ、お支払い。（と電卓を見せる）
尾崎　（お金を取り出して）はいどうぞ（と渡す）。
女将　（お金を確認して）ありがたくいただくわ。じゃあこれ。お釣りと部屋の鍵ね。お釣り、間違っていないわよね？
尾崎　うん、大丈夫。
女将　部屋は奥の扉を開けたすぐの階段から行けるから。

尾崎 分かりました。
女将 あと、夕食は夜の 6 時から 7 時まで、朝食は朝の 7 時から 8 時までにここに来て。
尾崎 覚えておくよ。ところで、お風呂は部屋にある？
女将 申し訳ないのだけどね、お部屋にはないのよ。
尾崎 そっか。
女将 浴場が一階の突き当りにあるから、それを使ってちょうだい。夜ならいつでもいいわ。昼は掃除するから、入らないでちょうだいね。
尾崎 分かりました。
女将 他に質問はある？
尾崎 ないね。また何かあったら、こっちから聞くから。
女将 分かったわ。
尾崎 とりあえず荷物、置いてきます。6 時からだったよね。
女将 ええ。
尾崎 なるべく早く降りてくるから。夕食の用意、お願いします。では。
女将 分かったわ。短い間、よろしくねえ。

尾崎は奥へと去る。
女将は見届けた後、上手に去る。
少しすると、尾崎が再び戻ってくる。

尾崎 女将さーん、いるー？

女将は尾崎の声を聞いてすぐに顔を出す。

女将 いくらなんでも、早すぎじゃない？
尾崎 いやあ、女将さんの料理が楽しみでしょうがなくって、急いできちゃった。
女将 そうなの。嬉しいこと言ってくれるわあ。
尾崎 座る場所はどこでもいい？
女将 ええいいわよ。……ちょっと待っててちょうだいね。すぐ用意するから。

尾崎は下手側の席に腰掛ける。
女将は上手へと戻っていく。
その後、女将は料理をお盆に載せて現れる。

女将 はいはい、お待たせ。
尾崎 意外と早いね。

女将 さぁどうぞ（と料理を尾崎の机の上におく）
尾崎 おお、これはすごい。（手を合わせる）いただきます。

尾崎は料理を口にする。

女将 どう？ 簡単な一品料理だけど。
尾崎 うん、美味い。美味いよこれ。
女将 ほんと？ これ、よく作る料理で、結構人気のよ。
尾崎 へー！ 道理で手が進む訳だ。（食べ進めて）特に野菜がいい仕事してる。
女将 そうなのよ！ この野菜ね。此处で採れたものを使ってるのよ。
尾崎 そうなんだ。へー、ここの野菜をねえ。じゃあ魚も？
女将 この辺りを流れている川で採ったを使うわ。
尾崎 へー。じゃあこの牛肉は？
女将 少し離れたスーパーの安売りで買ったお肉よ。
尾崎 流石に畜産まではやってなかったかあ。
女将 猪なら食べられるけどね。
尾崎 え。そうなの？
女将 でも、今じゃないのよ。猪は、秋だねえ。
尾崎 秋かあ。じゃあ秋は忙しい訳だ。
女将 そうなのよ。紅葉を見に来るお客さんでいっぱいになるの。ほら（と入り口の方を指さして）、その道がごった返すぐらいにね。
尾崎 へー、結構な人が来るんだ。
女将 そうそう。尾崎さんももう少し季節が秋だったら、紅葉が見れたかもしれないわね。
尾崎 猪も食べれたかもしれない。
女将 でも今の時期は、ある意味良かったかもしれませんよ？
尾崎 と、いうと？
女将 だって、今は忙しい時期が過ぎたところだからねえ。
尾崎 なるほど。加えて平日なのもあるか。
女将 今頃、都会では仕事帰りの人で溢れてるところね。
尾崎 立って電車に乗るところだ。
女将 私としても、ありがたいのよね。
尾崎 ありがたいんだ。てっきり、稼げなくて大変だ、なんて思ってるものかと。
女将 いやね。今、営業を縮小してるじゃない？
尾崎 あー。張り紙の。
女将 食事処だけね。
尾崎 何があったの？

女将 旦那がね。倒れちゃって。
尾崎 それは大変だ。何か重大な病気だったりしないよね？
女将 そこまで心配しなくてもいいわよ。ただ、原因が分からないのよ。
尾崎 分からない？ それって大丈夫なの？
女将 それもあって一応、検査入院中なのよ。それで今、私一人なんだけど、一人だと食事処までは回せないから、休業してるのよね。
尾崎 ちょっと待って。
女将 ん？ どうしたの？
尾崎 いや、旅館も回してる余裕なんてなくない？
女将 実は旅館の方はいつも私一人でやってるのよ。
尾崎 え、一人でやれるものなの、旅館経営。
女将 これが大丈夫なのよ。基本的に繁忙期しかお客さん、来ることがないから。
尾崎 そうなんだ。
女将 だから、今の状況って滅多にないことなのよ。
尾崎 ……なんかごめんね。こんな時に。
女将 （微笑んで）いいのよ。にぎやかなのはいいことだし。
尾崎 それで、旦那さんは帰ってこれるのかい？
女将 検査が終われば帰ってこれるって。
尾崎 なんだ、それならよかった。

山下が奥の扉から現れる。

山下 すみません。
女将 ああ、はいはい夕食ね。てきとうに座っててちょうだい。
山下 承知致しました。

女将は上手へと退場する。
山下は上手の席に着き、行儀よく姿勢を保ったまま、動かない。

尾崎 おーい。
山下 ……
尾崎 そこの座ってる人。
山下 ……私のことでしょうか？
尾崎 そうそう。あなた。あなたが、山下さん？
山下 はい。その通りですが、どうして私の名前をご存知なのでしょう。
尾崎 あー、女将から聞いてね。

女将、上手から料理を持って現れる。

女将　はい。山下さんお待たせ。（と料理を置いて）尾崎さん、もしかして私のこと噂してた？（と言って尾崎と山下の間に座る）

尾崎　いやあ、どうして山下さんの名前を知っているかと聞かれたものでね。

女将　そういうことね。（山下に）山下さん、この人は尾崎さん。観光に来たんですって。

尾崎　（山下に）どうも、尾崎です。

女将　で、あの人がさっき言っていた山下さんね。

山下　（尾崎に）お初にお目にかかります。私は山下と申します。

尾崎　（山下に）なんか君、すごい硬い話し方をするね。

山下　はい。よく言われます。

尾崎　そこまでかしこまらなくていいのに。

山下　申し訳ございません。性分ですので。

尾崎　そ、そうなんだ。

山下　（女将に）……すみません。もう、いただいてもよろしいのでしょうか。

女将　え。ええ、いいわよ。

山下　ありがとうございます。では、いただきます。

山下は食事を始める。

女将　味はどう？

山下　普通です。

女将　え？

山下　普通です。

尾崎　あー、こういう時は美味しいって言わなきゃ。

女将　（尾崎に）ちょっと、それどういう意味。

尾崎　（女将に）いや、僕は不味いなんて思っていないからね？

山下　おいしいです。

女将　……そう。

尾崎　良かったじゃない。美味しいって言われて。

女将　嬉しくないわよ。分かりきったお世辞なんて。

少しの沈黙。

尾崎　……や、山下さんはさ。年齢っていくつなの？

山下 今年で27になります。

尾崎 じゃあ僕より年下なんだ。山下くんって呼んでもいいかい。

山下 どうぞ。お構いなく。

尾崎 では遠慮なく。……山下くん。

山下 ……为什么呢。

尾崎 お仕事は何してるの？

女将 多分あれじゃないかしら、電気関係の仕事。

山下 いえ、違います。

女将 外れちゃった。残念。で、何やってるのよ。

山下 不動産の仕事をしています。

女将 へー、そうだったの。ちょっぴり意外。

尾崎 不動産かあ。じゃあ、これから誰かにお家とか紹介する感じか。

山下 はい。その予定です。

尾崎 へえ、そりゃすごいや。

女将 ん？

尾崎 （女将に）どうかした？

女将 いやね。誰かにお家を紹介するって今言ったけど、誰に紹介するのかなって。

山下 それ以上はお答えできません。

女将 えー。ケチ。

尾崎 女将さん。誰だって、内緒にしたいことが一つや二つあるでしょう？

女将 それもそうよね。（山下に）ごめんなさいね。

山下 いえ、お構いなく。

女将 （尾崎に）話ついでに聞いちゃうけど、尾崎さんはなんの仕事をしてるの？

尾崎 え、僕？ あー、今は働いてないんだよね。

山下 働いてないのですか？

尾崎 ん？

山下 （立ち上がって）それは、怠慢ではないですか？

尾崎 急にどうしたんだ？

山下 （声を荒げて）働けるのにも関わらず働かないだなんて！ 働かない人間に存在意義なんてないのですよ？

尾崎 そんなことはないと思うけど。

山下 そんなことがあります。現に私が勤める会社では、働かない人間はゴミクズ同然です。

尾崎 あのさ、ちょっと過激なんじゃない？

山下 いいえ。そんなことはありません。そんなこと、あるはずがないのです。

女将 ちょっと山下さん。落ち着いて（と立ち上がって山下を宥める）。

山下 落ち着けるわけがないじゃないですか。この人は、成人男性として当然の責任を放棄しています！（女将に）女将さん、あなたもそう思うでしょう？

女将 いや、そこまでは思わないけど。私としては、お金が無いなら働いた方がいいとは思うぐらい。

尾崎 それはそうだ。

山下 （女将に）あなたもこの人に味方するんですか。そんなのやっぱりおかしいです。

尾崎 山下くん。僕は会社辞めた身だからハッキリとは言えないけどさ。

山下 （遮って）待ってください。

尾崎 もう少し気楽につて、え？

山下 会社、辞めたんですか？

尾崎 うん。ちょっと前に。

山下 （声を荒げて）ますます許されることではないですよ、それは。あなたのことを拾ってくれたのですよ？なのに期待に背くだなんて。そんなこと、やっていい訳がありません。

尾崎 今の時代は退職は当たり前だよ？ほら、ニュースでもやってたじゃない。退職代行とかさ。

山下 退職代行で辞めたのですか？

尾崎 僕はちゃんと辞表を出してるよ。

山下 危ない所でしたね。もしそうでしたら、私はあなたに手をあげているところでした。

尾崎 そんな野蛮な。まあ退職代行の話を抜いても、前向きな退職とかあるわけで。

山下 前向きですって？裏切り行為のどこが前向きなのでしょう。

尾崎 裏切ってはないでしょうに。

山下 いいえ。（声を荒げて）これは裏切りです！悪です！我々社会人は、会社からクビを切られるまで、会社に奉仕をし続ける。それこそが、正社員の務めるといふものなのです！

尾崎 そんなめちゃくちゃな。

山下 だからあなたもこんな所で油を売っていないで早急に社会義務を果たしに……

女将 （遮って）はいはい山下さん落ち着いて、明日、仕事あるんでしょう？

女将、山下の近くに行きなだめる。

山下 ……すみません。取り乱しました。料理、ごちそうさまでした。先に失礼します。

山下は奥の扉に退場する。

尾崎 びっくりした。

女将 山下さん。凄かったわね。都会の若者って、あそこまで活気があるものなの？
尾崎 いや、あれは中々特殊な部類なんじゃないかな。
女将 ふーん。
尾崎 僕もそろそろ行こうかな。
女将 そう。おやすみなさい。
尾崎 その前に、聞きたいことがあるんだけど。
女将 どうしたの？
尾崎 明日、この辺を見て回ろうかなって思ってた。女将さんのおすすめの場所とかな
いかなって。
女将 あーそういうことね。ちょっと待っててちょうだい。
尾崎 ありがとう。

女将は立ち上がって帳場へ向かい、一枚の紙を取り出して尾崎に渡す。

女将 これ、周辺の地図。(指をさして) 私のおすすめはこことここ。とっても綺麗な景
色が見れるのよ。
尾崎 へー。
女将 (指をさして) あと、ここのお店は美味しいご飯が食べれるから、お昼におすすめ
ね。
尾崎 (指をさして) こっちにはなんかないの？
女将 こっちは……あまりおすすめしないわね。
尾崎 どうして。
女将 何もないのよ、そっちの方。面白いものなんてないだろうし……行かない方がいい
わ。
尾崎 でも、お寺とかあるけど……
女将 ここが一番ダメよ。草木も生えてないし、陰気臭いし、見てるだけで体調悪くなる
わ。それにこの住職さん、外の人に厳しいから尚のこと良くないわ。
尾崎 そこまで言うんだ。
女将 とにかく、絶対行かないでね？ 良い？ 分かった？
尾崎 分かった、分かったから。頭の隅に留めておくよ。
女将 分かればいいのよ。
尾崎 ありがとうね。明日おすすめされた場所に行ってみるよ。

尾崎は立ち上がる。

尾崎 ご飯美味しかったよ。じゃあまた明日。おやすみなさい。

女将 はい、おやすみなさい。

尾崎は奥の扉から退場する。

暗転。

2

翌日の夕方六時前である。

食堂の様子に変化はない。

尾崎が戸を開けて、下手から現れる。

昨日とは違い、首からデジタルカメラをさげている。

尾崎 女将さーん。いるー？

女将 （声のみ）はい。

女将が上手から現れる。

女将 ああ尾崎さん。おかえりなさい。もうご飯は食べていく？

尾崎 お願いしてもいいかな？

女将 分かったわ。ちょっと待っててちょうだい。

女将は上手へと戻っていく。

尾崎は昨日と同じ席に座り、デジタルカメラを手にもって、保存された写真データを眺めている。

少しすると、女将が料理を持って、戻ってくる。

女将 はい尾崎さん。お待たせ。

女将は机の上に料理を置く。

尾崎はカメラを眺め続けている。

女将 尾崎さん、ちょっと。料理、冷めちゃうわ。

尾崎 （気づいて）ん？ ああ、ごめん。

尾崎はカメラを机の端に置く。

尾崎 いただきます。

尾崎は食事を始める。

女将は昨日と同じ席に座る。

尾崎 うん。今日も美味しいな

女将 良かったわ。ところで、さっきは何見てたの？

尾崎 ああ、あれ？ 今日撮った写真をね。

女将 そうなの。

尾崎 女将さんがおすすめした所、行ってきたよ。

女将 良かったでしょ。あそこ。

尾崎 うん、とっても。思わず写真撮っちゃったよ。あはは（と笑う）

女将 それって、見ることはできたりする？

尾崎 いいよ。（カメラを触り、画面を変えた後女将に見せる）ほら。

女将 （カメラを眺めて）わあ。とても綺麗に撮れてる。私だったらこんなの撮れないわあ。

尾崎 他には……（画面を切り替えて再度女将に見せる）これとか。

女将 （カメラを眺めて）これは……あそこよね？ ほら、川の麓のところ。

尾崎 おあ。よく分かったね。

女将 まあ、長く住んでるからそれぐらいはね。へー、これもよく撮れてる。

尾崎 こーやって素直に褒められるとなんだかこう、こそばゆいな。

女将 何かこつとかあったりするの？

尾崎 強いて言うなら、タイミングかなあ。良いタイミングが来るまで粘って待つ。そして良いタイミングが来たら見逃さずにシャッターを切る。すると、いい写真が撮れるんだよね。

女将 なるほどねえ。……他の写真も見えていい？

尾崎 いいよ。（カメラのボタンを指さして）ここ押したら次の写真になるから。

女将 分かったわ。

尾崎は女将にカメラを渡す。

女将はカメラを受け取りしばし写真を見る。

尾崎 旦那さんの検査結果はどうだった？

女将 （顔を上げて）今日ね、連絡が来たのよ。体調に問題は無し、健康体ですって。

尾崎 近いうちに食事処も再開できそうだね。

女将 そうね、これからまた頑張らなくちゃね。

少しの沈黙。

女将 （写真を眺めて）あれ？
尾崎 どうした？
女将 ここって……あそこよね。
尾崎 あ、あーはい。そうです。
女将 行かないで、って言ったでしょう。
尾崎 ごめん、悪かったよ。
女将 この写真、消すわね。
尾崎 もしかして、撮るのも駄目なの？
女将 そうなのよ。
尾崎 インターネットに投稿しなくても？
女将 それも駄目ね。
尾崎 うーん。やっぱり消すのは辞めてほしいかなあ。

女将は黙って写真を消す。

尾崎 ああ！ ちょっと！
女将 ごめんなさいね。でも、よろしくなかったから。
尾崎 （落胆して）あー、折角よく撮れてたのに。
女将 こればかりはしょうがないわ。我慢してちょうだい。
尾崎 ……はい。

しばし尾崎は黙って食事を取る。

女将 で、どうだったの、あそこ。
尾崎 （顔をあげて）……感想について聞してる？
女将 ええ、そうよ。
尾崎 普通この流れで聞く？
女将 興味があるのよ。あそこが外の人からどう見られるかって。
尾崎 ああそういうこと。……まあ、良かったと思うよ。ああいうお寺ってどこも風情があるからね。ああただ……
女将 ん？
尾崎 怒鳴り声は聞こえたよ？
女将 怒鳴り声？

下手袖から住職（63）の怒鳴り声が聞こえる。

尾崎　　そうそう、こんな感じの。
女将　　あー。（と頭を抱える）
住職　　（勢いよく戸を叩いて）おい！　女将はいるか！
女将　　……開いてるわ。
住職　　邪魔するぞ！

住職が勢いよく戸を開けて現れる。

住職　　お前。今日の昼によそ者が来たぞ！　これは一体どういうことだ！
女将　　そりやお寺なんですもの、参拝客ぐらい一人や二人来るわ。
住職　　参拝客ならちゃんと通す。だがな、そうじゃねえ。
女将　　（尾崎に）参拝しなかったの？
尾崎　　（女将に）え？　まあ、はい。
住職　　（尾崎を見て）誰だ？　こいつは。
女将　　誰って、あなたが勝手に言ってるよそ者よ。
尾崎　　（住職に）どうも。
住職　　（尾崎に）お前じゃねえよ。スーツ着たいけ好かないガキだ。
女将　　スーツ？　あー。
住職　　（女将に）なんだお前。知ってるのか。
女将　　……知らないわ、そんな人。
住職　　ほんとか？
女将　　ええ。
住職　　知らねえなら、他のところにも聞くしかねえな。
女将　　聞いてどうするのよ。
住職　　分かってるだろ？　ここから追い出してやる。（尾崎に）お前もだからな。
尾崎　　え、僕も？
住職　　悪いことは言わねえ。お前もさっさと出てけ。
尾崎　　は、はあ。
住職　　今すぐ出てけ。
尾崎　　そう言われましても。
住職　　言い訳ばかりしやがって！
女将　　（住職に）ちょっとあんた、営業妨害は辞めてちょうだい。それに尾崎さん、明日には帰りますもんね。

尾崎　　そうそう。そうなんです。あはは。
住職　　ふん。まあいい。明日また来る。

住職は去る。

尾崎　　あの人、何だったの？
女将　　あの人ね、あの寺に住んでる人よ。
尾崎　　あの寺って、写真を撮った所？
女将　　そう、あそこの人。
尾崎　　あー、そりゃ消すなあ。
女将　　そうよ。もしもバレたら、どうなるか知れたものではないわ。
尾崎　　僕にも帰れって言ってたし。あの人、いつもあんな感じなの？
女将　　実はそうでもないのよ。普段は別にお構いなくって感じなんだけどね。たまーにあんな感じになるのよ。
尾崎　　もしかして、山下くんが怒らせちゃったんじゃないの？
女将　　でも尾崎さんにまで帰れとは言わないでしょう。
尾崎　　まあ、それもそうか。
女将　　もっと別の理由があるんじゃない？
尾崎　　別の理由ねえ……うーん。

尾崎が考えていると、山下が下手から勢いよく入ってくる。

女将　　ああ山下さん、お帰りなさい。
山下　　クソッ、クソッ、クソッ！

山下は歩き回りながら、一人ごとを呟いている。

女将　　（引き留めようとして）山下さん、夕食はどう……
山下　　（遮って）うるさい！

山下、女将を押し倒す。

女将　　うわあ！（と倒れる）
尾崎　　（立ち上がって山下に）おい、何してるの！（女将に）大丈夫？
女将　　……ええ、なんとか。

尾崎は山下に近づいて腕を掴んで、引き留める。

山下 何です！

尾崎 山下くん。ちょっと、それはないんじゃないかな。女将さん、君に何もしてないだろう。

山下 うるさいうるさいうるさい！（と振り払おうとする）

尾崎 ちょっ、力強っ。

山下は諦めて振り払うのをやめる。

少しの沈黙。

尾崎 ……落ち着いたか？

山下 ……

尾崎 ほら、女将さんに謝って。

山下 ……

尾崎 謝って！

山下 （女将に）……申し訳ございませんでした。（と言って去ろうとする）

尾崎 おい！

山下 ……部屋に戻りたいので、手を放してもらいたいのですが。

尾崎 ダメだ。

山下 もう、いいですよ。

女将 （立ち上がって）ダメよ。まだ夕食、食べてないじゃない。

山下 だから、いらないですと言いましたよね？

女将 まあまあ。

山下 ……

女将は上手へと立ち去る。

尾崎 ふてくされてないで、座ったらどうだい。

山下は、女将が座っていた席に座る。

尾崎は山下の腕を放し、元の席に座る。

尾崎 で、何があったの。

山下 ……あなたには関係のないことです。

尾崎 そんなこと言わずにさ。言ったら楽になるかもしれないよ

山下　だからあなたには、関係のないことです。
尾崎　……

女将が上手から戻ってきて、山下の前に料理を置く。

女将　山下さん、どう。落ち着いた？

山下　……

女将　（尾崎に）さっきからこんな感じなの？

尾崎　うん、ずっとこれ。どうにかならないかなあ。

女将　山下さん。辛かったことはご飯食べて忘れちゃいましょう。うん、それがいいわ。

尾崎　そうそう。とりあえずそうしたほうがいいよ。（自身の残った料理を口にして）うん、冷めちゃったけど美味い。

女将　あら嬉しいわあ。私が作った料理だもの。冷めてもおいしさに決まってるわ。

尾崎　そうなんだ一。じゃあ他の料理もおいしいんだろうなー。

山下　（遮って）あなたたちは！　幸せだからそこまで呑気でいられるんです。（尾崎に）あなたは辛いことから逃げて、（女将に）あなたはやりたいことをやっていて、そんなあなた達には分かるわけがないじゃないですか！

尾崎　あのねえ、折角僕が優しくしてあげてるのにまだそんな……

女将　（尾崎を遮ってなだめる）まあまあ。

山下　本日も失敗しました。お相手にとっては魅力的な提案のはずです。にも関わらず、断るのです。挙句の果てに帰れ、出ていけと言われ、話さえきいてもらえない始末です。私が一体何をしたというのですか。なんで私ばかりこんな仕打ちを受けなきゃいけないのですか。誰もかれも馬鹿にして！

尾崎　馬鹿にはしてないんじゃないかな。

山下　は？

尾崎　そりゃ山下くんがどんな仕事をしているかは分からないよ。でもさ、皆何かしら事情があるからね。多少は仕方ないとは僕は思うよ。

山下　綺麗事ばかり。私のことなんてなにも知らないくせによく言いますよ。

尾崎　あのね、僕が君のことを知らないのは当然だからね。だって、全然話してくれないし。

女将　私と会った時も、最低限のことしか教えてくれなかったわ。

尾崎　まずは、自分のことを話してみるのがいいんじゃない？　いろいろと楽になると思うよ。話せる人、誰かいらないの、両親とか友達とか。

山下　そうして、一緒に楽しくいられる相手がいたら、どれほど良かったことでしょうね。

尾崎　え？

山下　両親は口を開けば「勉強しなさい、良い成績を収めなさい」しか言いませんでした。学生時代の同級生は誰もかれもが私にいやがらせばかり。信頼できるのは……ああやっぱりダメだ。このままだと、あの人たちに、捨てられる。

尾崎　あの人たちって、誰？

山下　こんな私を社長は拾ってくれた。こんな私を先輩は親切に指導してくれた。あの人たちを裏切ることは絶対にダメだ。

山下は自身を抱きしめながら、体を震わせて、手の爪を噛む。

尾崎　ちょっと山下くん、どうした？

女将　山下さん、大丈夫？

山下　成功しなきゃ。捨てられる。でも、どうやって？　ああ駄目だ。また失敗する。

尾崎　こりゃ駄目だ。自分の世界に入っちゃってる。山下くん一旦落ち着いて。そうしたら別のアイデアが浮かぶし、な？

山下　（うわ言のように）別の……そうだ、こうすれば良かったんだ。

尾崎　どうした？

山下　（笑って）ハハハ、なんでこんな簡単なこと、思いつかなかったんだろう。

山下は立ち上がり、下手へと走って退場する。

尾崎　おいちょっと！　どこに行くんだ！

女将　え？　山下さん！　ちょっと！　尾崎さん、ちょっと見に行ってもらってもいい？私じゃ到底追いつけそうにないから。

尾崎　分かりました

女将　ええ。お願いね。

尾崎は下手袖へ向かう。

少しすると尾崎は戻ってくる。

尾崎　ダメだ。どこにもいない。

女将　山下さん……一体どこに。

尾崎　山下くん、こんな夜に一人で……大丈夫かなあ

女将　大人なんだから、そこは大丈夫じゃない？

尾崎　いや、そうじゃなくて。彼結構追い詰められてたからさ。何か問題起こしそうでね、心配なんだよ。

女将　でも、私たちにはどうすることもできないわ。個人の問題ですし。それにあの面倒くさい人が関わってるとなおさら、ねえ。

尾崎　さっきの話に出てたお客様ってさ。

女将　ええ、住職ね。間違いなく。

尾崎　尚更どうもできないじゃないか。

女将　尾崎さんは仲裁できると思うわ。

尾崎　まあできないことはないと思うけど、無傷で済まないだろうね。

女将　とりあえず私はやれることをやっておこうかしら。

尾崎　何をするおつもりで。

女将　食堂の入り口を閉めない。

尾崎　それ、大丈夫なの？

女将　え、何が？

尾崎　いや、強盗とかそういう犯罪に巻き込まれないかって。

女将　ああ、そういうことね。そこは大丈夫よ。こんな田舎でそういうことは起こらないから。

尾崎　犯罪者に怯える宿泊者の気持ちを考えてほしいんだけど。

女将　もし怖かったら、部屋の戸締りをしっかりしておけば大丈夫よ。そこまで気にする必要はないわ。

尾崎　気にするよ。そんな不用心な環境。

尾崎は立ち上がる。

女将　お部屋に戻るの？

尾崎　うん。早く寝て夜に備えたいからね。

女将　だからそんな危ないことは起こらないって。

尾崎　用心に越したことはないからね。では、また明日。おやすみなさい。

女将　おやすみなさい。

尾崎は扉を開けて退場する。

女将は見送った後、尾崎と山下に置いてあった皿を持って退場する。

食堂の照明が消えて薄暗くなる。

夜の食堂である。

扉がゆっくりと開き、山下が下手からこっそりと現れる。

山下 開いてた……

山下はポケットに入ってるものを服越しに確認する。
確認を終えると、舞台奥の扉を開けようとするが、開かない。

山下 クソッ。

山下は奥の扉から離れて、上手に移動するがすぐに戻ってくる。

山下 馬鹿にしがたって。

山下は上手の扉を叩く。

山下 すみません！ 開けてください！ 誰か、誰か起きてませんか！ 開けてくださ
い！

長い沈黙の後、山下は扉を蹴る。

山下 （叫ぶ）クソッ！

山下は下手に向かおうとして立ち止まる。

山下 （呼びかける）誰か、いるのですか？

下手袖から女の声が聞こえる。

女 受け取りに来ました。

山下 すみません、用事でしたら明日の朝に

女 開けてください。

山下 只今この家の者は寝ておりますので、また後日に。

女 開けてください。開けてください。

山下 ……

女 開けてください。開けてください。開けてください。

山下 うるさい！

少しの沈黙。

女 開けてください。

山下 辞めろって。

女 開けてください。

山下 辞めろよ！

女 開けてください。

山下 うわあああ！（と叫びながら近くにあった椅子を戸に向かって投げて後、上手奥まで後ずさってうずくまる）もう、やめてくれ。

女の声は止まない。

暗転。

4

翌日の早朝 7 時頃。

食堂は荒らされたままの状態である。

上手側奥に山下が倒れている。

上手から女将が体調がすぐれない様子で現れる。

女将 （驚いて）えっ！ や、山下さん？

女将は山下に駆け寄る。

女将 山下さん、大丈夫ですか。山下さん。

山下は呻く。

女将 （胸をなでおろして）良かった……

女将は山下を揺さぶる。

女将 山下さん、起きてください。山下さん。（と揺さぶり続ける）

尾崎が奥の扉から降りてくる。

尾崎 結局寝すぎちゃったなって、(驚いて) うおっ (と尻もちをつく)。いった…… (と尻をさすりながら立ち上がる) びっくりした。

女将 尾崎さん、山下さんが……

尾崎 息はしてるんだよね？

女将 ええ、でも目を覚まさなくて……救急車を呼んだ方が良いかしら。

尾崎 息をしてるなら、疲れて寝てるだけじゃないかな。

女将 じゃあこれって、何があったのかしら？ (と周りを見渡す)

尾崎 ほらあ。不用心だったから変な人が来たんだ。

女将 それはないわ。

尾崎 きっぱり言うね。

女将は壁に手を突きながら帳場に行く。

尾崎 女将さん、もしかして体調悪い？

女将 え、ええ。このぐらい平気よ。

女将は帳場を確認する。

女将 確認したけど、何も取られていなかったわ。分かり切ってたことだけでも。

尾崎 田舎の立地を信頼しすぎじゃない？ もし盗まれてたらどうするつもりだったの。

女将 そうしたら、警察に通報するわ。

尾崎 まあそれはそうだけど。盗んだんじゃないなら、ひょっとして山下くん、やけ酒でもしたんじゃないか？ 昨日のこともあったことだし。

女将 でも、他の飲み屋さんはここからそれなりの距離があるわ。歩いていくだなんて無理よ。

尾崎 このあたりに飲み屋とかないの？

女将 強いて言うなら、夫が居るときのここね。

尾崎 だったら、ホントに何があったんだ？

女将、近くの椅子に座りこむ。

尾崎 女将さん。やっぱり体調、あまりよくないでしょ。

女将 ええ。朝からなんだか調子が悪くって。

尾崎 熱とかはあった？

女将 熱、というよりかは、頭痛がひどくて、気持ち悪いのよ。

女将は机に突っ伏す。

尾崎 ちょっと横になってきた方がいいんじゃない？ 山下くんは僕が見ておくから。

女将 ごめんなさいね。

尾崎 いいよ。そのぐらい。

女将は立ち上がろうとするが、ふらつく。

尾崎 肩、貸すよ。

尾崎は女将の肩をかつぐ。

女将 ありがとうね。

尾崎 とんでもない。数日間よくしてくれたんだから、むしろこれぐらいやらないと。

尾崎と女将は上手へと退場し、少しすると尾崎だけ戻ってきて、山下の近くに座る。

尾崎 さて、(山下を除いて) まだ寝てる。(山下を揺さぶる) おおい、起きろお。……駄目か。

下手袖から勢いよく戸を叩く音がする。

尾崎 (驚いて) うおっ。誰か来た。

尾崎は立ち上がり、下手まで向かう。

下手袖から住職の音がする。

尾崎 はい。どちらさまで。

住職 俺だ。

尾崎 えっと……

住職 女将はいないのか。

尾崎 あー、女将なら……今は体調不良で休んでいます。

住職 じゃあお前は誰だ。

尾崎 えっと、僕は……

住職 入るぞ。

尾崎 ああ、ちょっと。

住職は勢いよく戸を開けて登場する。

住職 （尾崎を見て）なんだ、昨日のやつか。

尾崎 （住職を見て）ああ。はい。

住職 なんだ、まだ帰ってなかったのか。

尾崎 あはは。そろそろ帰りますよ。

住職 だと良いんだがな。

住職は舞台中央まで歩くと呻き声をあげる。

尾崎 どうかしましたか？

住職 なんだここは！ 何故ここまで淀んでいる！

尾崎 いや、綺麗ですよ？ 埃一つもない。

住職 そういうことではない！ 悪い気が溜まっていると言っているんだ。

尾崎 悪い気？

住職 そうだ。心身に害を成す悪い気が、この場に溢れている！

尾崎 ああ。

住職 なんだ！

尾崎 さっきから悪い気、悪い気って言ってますけれど、何ですかそれ？ 工場からでる煙のことですか？

住職 （溜息をついて）これだから、何も知らないやつは。仕方がない。俺が直々に教えてやろう。

尾崎 はあ。

住職 ある地域には、行くだけで元気になれるような場所が存在する。お前も聞いたことがあるはずだ。確か、パから始まる言葉だ。

尾崎 パワースポット。

住職 そうだパワースポット。その様な場所に流れている目に見えないものが良い気だ。

尾崎 ああ、マイナスイオンのことですね。

住職 違う！ もっと抽象的なものだ。そうだな、自然のエネルギー！ これなら納得がいくだろう。

尾崎 まあ、なんとなく？

住職 なんとなくでいい。続けるぞ。逆に行くだけで体調を崩したりするような場所がある。ほら、テレビのバラエティでもやってるだろ、そういうの。

尾崎 心霊スポット。

住職 そうだ心霊スポット。つまりだな、ここは今、心霊スポットみたいなことになっているのだ。

尾崎 え？ でも僕、なんともないですけど。

住職 当然だ。お前は悪い気がある場所に住んでいるからだ！

尾崎 いや、そんなことはないと思いますけど。

住職 違う、というほどお前が慣れてるだけだろう。

尾崎 はあ。

住職 例えば、綺麗な川にしかない生き物がいたとしよう。そうだな。メダカとか考えてもらえばちょうどいい。もしもメダカが、汚い川にいきなり入れられたら、どうなる？

尾崎 普通に考えれば、体調不良になりますね。

住職 心当たりがあるよな？

尾崎 もしかして、女将さんの体調不良は、そのせいって、言いたいんです？

住職 当然だ。普段この辺りは綺麗な気が満ちているからな、こんなことにもなるだろうな。

尾崎 そ、そうなんですねー。そういえば、住職さんは大丈夫なのですね。

住職 俺は元々そういう場所に住んでいるからな。

尾崎 つまり住職さんは心霊スポットに住んでいるんですね。

住職 そうだ、俺の家も悪い気に満ちた場所だ。

尾崎 うわー。よくそんな所に住めますね。

住職 仕方ないことだったからな。

尾崎 へー、ところで。

住職 何だ。偉くいい加減だな。

尾崎 いや、僕のことはいいですよ。住職さん、なんでここに来たのかなって。

住職 分からないのか？

尾崎 はい。全く存じ上げません。

住職 元々は別の用事だったんだが、淀んだ気の原因もこいつのせいらしいからな。

住職は山下の元に近づいて、身体をまさぐる。

尾崎 ああ、ちょっと。この人まだ寝てるから。

住職 今取り込み中だ。少し黙ってろ。

尾崎 ……

住職はポケットから呪物を取り出す。

住職 やはり持ってたか。この盗人め。

尾崎 え？ 山下くんが盗人？
住職 こいつは寺からこれを盗みやがった。どういうつもりか分からないがな。
尾崎 いや盗んだって……冗談でしょう？
住職 いや、こいつが持ってるものは俺の寺に供養されていたものだ。
尾崎 あの、お聞きしたいのですが、山下くんは、一体何を盗んだんです？
住職 見るな！
尾崎 はい！ すいません！

尾崎は視線を別のところに向ける。

住職 これはな、最近ここに持ち込まれた呪物の一つだ。
尾崎 呪物……
住職 これを持ってきた奴が言うには、いつの間にか置いてあったらしい。それでこれを持っていると、変な奴に扉を開けてほしいと頼まれるらしい。
尾崎 それで開けると、どうなるんですか？
住職 知らん。
尾崎 ええ……知らないんですか。
住職 知らんものは知らん。だがな、そういう時は大抵ろくなことにならないものだ。
尾崎 あなたの家にも来ましたか？
住職 知らん。
尾崎 それも知らないんですか。
住職 だが、漠然と危ないということだけは分かる。だから、俺は毎日供養を続けてる。
尾崎 なんだか、大変ですね。

住職は呪物に紙を巻く。

尾崎 あの、今は何を。
住職 これか？ こいつが目に触れるよりかはましだからな。応急処置というやつだ。
尾崎 目に触れるとどうなるんです？
住職 俺はどうとでもなるが、一般人の目には毒なだけだ。普段なら箱に入れているんだがな。

住職は呪物を机の上に置くと、下手へ向かう。

住職 おい、お前。俺は一度寺に戻る。
尾崎 え！ これは、これはどうするんです！（と呪物を指さす）

住職　そのまま持っていけるか！　ただでさえ悪影響が出てるんだ。そのまま外に出してみろ。もっとひどいことになるぞ。

尾崎　いやそうじゃなくて、もう来てほしくないかなあって。（と呟く）

住職　なんだ！

尾崎　いいえ！　なんでもありません！

住職　いいか！　俺が戻ってくるまで一步も外に出ず、扉も開けるなよ！　誰かが招かない限り、あれは絶対屋内には入れない。

尾崎　分かりました。

住職　いいか！　絶対だぞ！

住職は去る。

尾崎　と言われてもなあ。

尾崎は下手の戸を開けて、外に出ると、すぐに戻ってくる。

尾崎　やっぱり、嘘っぱちだったか。だと思ったんだよなあ。

尾崎は山下の様子を確認する。

尾崎　そしてこいつも起きないし、どうしよっかなあ。（山下を揺すって）おおい、いい加減起きろって。今何時だと思ってるんだあ。

尾崎が揺さぶり続けると、山下が目を醒ます。

尾崎　おお。　やっと気が付いた。

山下　（急に起き上がり）女！　女はどこに！

尾崎　女？　もしかして、いい夢でも見てた？

山下　そうじゃないです！

尾崎　ああ……ごめん。

山下　いた、いたんですよ。女が外でずっと……いや、あれは女じゃない？

尾崎　いやどっちだよ。

山下　声は女だったんです。でも、中からうっすらと浮かんで見えたシルエットはそうではなかった。

尾崎　何だったの。

山下　分かりません。

尾崎 いや、分からないなんてことある？
山下 私には、あれが人だったかどうか、分からないんです。
尾崎 ……ま、まあ気にすることはないよ。悪い夢でも見たんだって。
山下 ……そうですね。では、一度部屋に戻りますのでこれにて。
尾崎 待って。（と言って山下の腕を掴む）
山下 放してください。本日も仕事があるのですが。
尾崎 いや、病み上がりでしょ？ ちょっとゆっくりした方がいいんじゃないかなって？
山下 しかし、今にでも準備を始めなければ、時間に間に合わないのですが。
尾崎 もしも風邪だったら、お客さんにうつすのもよくないしさ。
山下 いや、しかし。
尾崎 それとも、今すぐここから離れたい理由とか、あったりする？
山下 ……
尾崎 何か隠してるよね？
山下 （顔を反らして）……いいえ、何も。
尾崎 本当に？
山下 ええ。そもそも、何か隠してたところで、あなたに言う必要はありませんから。
尾崎 ……お寺から物、盗んだでしょう。
山下 （驚いて）どうしてそれを！
尾崎 聞いたからね。
山下 誰にです！
尾崎 西の寺の住職さんに。
山下 お客様が、来てたのですか？
尾崎 うん。さっきまで。

山下は無言で手を振り払おうとする。

尾崎 うおっ、相変わらず力強っ！
山下 放してください！
尾崎 嫌だよ。
山下 あなたには関係のないことでしょうか？ どうしてそう何度も何度も、首を突っ込もうとするのです！
尾崎 強いて言うなら、優しさと正義感？
山下 それが余計だと言ってるんです。いい加減、放してください！
尾崎 だから嫌だって。
山下 どうして！ どうして放してくれないんですか！ 何度も頼んでるのに！

尾崎 いや、放さないでしょ。普通に考えたら。

山下は尾崎を睨む。

尾崎 そんな怖い顔しても無駄だって。いい加減諦めたら？

山下 ……

尾崎 とりあえず、座ろうか。

山下と尾崎の二人は、腕を掴んだ状態のまま、向かい合って座る。

尾崎 ……いつも都合が悪くなったら、こうやって逃げようとするの？

山下 あなただって、逃げたじゃないですか。

尾崎 何から。

山下 仕事という責任から。責任から逃げて、今は無職じゃないですか。

尾崎 いや、別に責任から逃げたくて仕事を辞めたわけじゃないからね？

山下 え？

尾崎 僕ね、昔行きたかった会社があったんだけどさ。そこに落ちちゃって、一個前の職場に今までずっといたんだ。

山下 不本意で入ったから嫌気がさしたんですね。

尾崎 そんなことないよ。むしろ前の会社には良くしてもらったと思ってるよ。でもさ、年齢も年齢だし、挑戦するならこれが最後かなって、思ったんだ。

山下 それで、結果はどうだったんですか。

尾崎 結果？ 無事に転職成功して、前の会社とも円満に退社したよ。いいでしょ。

山下 それは自慢ですか？

尾崎 自慢だよ。そりゃあ人生の中で最も上手くいったことだからね。

山下 馬鹿にして！（と言って空いた手で殴りかかろうとする）

尾崎 ちょっと！ 暴力反対。そういう短気なところ、よくないと思うよ。

山下 （手を引っ込めて）誰が怒らせたと思っているのですか。私が気にしていることを何度も言って！

尾崎 ああ、ごめんね。山下くんってとても分かりやすい人だなんて。

山下 たかだか数日で私の何が分かると言うのです？

尾崎 山下くんって、思い込みが激しいでしょ。

山下 ……

尾崎 思い込みが激しいから、いつの間にか暴走する。今回盗んじやったのも、そういうことなんですよ？

山下 ……お客様がここにいるべき理由さえ無くなれば、立ち退くと思ったんです。

尾崎　だから盗んだんだ。

山下　……はい。

尾崎　やっぱり、短絡的過ぎだよ。もう少し冷静に考えたら、他に良い解決方法があったんじゃないの？

山下　これしか、無かったんです。他は全部足がつくと思ったから。

尾崎　いやそういう犯罪の方向じゃなくてもっとこう、上手く交渉するとかさ。考えつかなかったの？

山下　あなたも話したでしょう？　お客様と。

尾崎　まあ、話したよ？

山下　それじゃあ分かるでしょう。あの人が話を聞いてくれないことを。

尾崎　確かに。あの人、スピリチュアルに傾倒してて話しにくかったけど。

山下　だったらこういう手を取るしかないじゃないですか。

尾崎　だからその飛躍がおかしいんだって。

山下　だって先輩が、手段を選ぶなって、言っていましたから。

尾崎　……（顔を伏せる）

山下　どうしたんですか？

尾崎　（笑って）あのさ。山下くんってバカ真面目だよねー。

山下　いきなりどうしたのです？

尾崎　しかも超がつくほど。言われたい？　真面目だって。

山下　ええ。言われますよ。

尾崎　それを誇りに思っていたりもしちゃうんだ。

山下　ええ、はい。

尾崎　そこも含めて真面目だよ君。

山下　……

尾崎　バカ真面目に人の言いなりになった結果、自分の頭で考えられないダメ人間。それが今の君だよ。

山下　……尾崎さんは、成功体験が多い人ですよ？

尾崎　そりゃあ、ねえ。転職の件もそうだし。

山下　僕には無いのですよ。そのような成功体験。

尾崎　いや、誰しもあると思うけど。山下くんが気づいてないだけじゃないの？

山下　そんなことはありません。本当に、ないのです。自分で動けば、必ず何かを言われる。そういう人生だったのです。

尾崎　そういや、昨日も似たようなことを言ってたね。つまり、今の自分が出来たのは周りの環境のせいなんだと、山下くんは思ってる。

山下　はい。その通りです。

尾崎　甘いよ。甘すぎる。そんなんじゃこれからも、何度も失敗するよ。

山下 ではどうすれば良いのですか。教えてくださいよ。
尾崎 教えるわけないよ。さっきからずっと言ってるでしょ？ 自分で考えろって。
山下 ……
尾崎 何が正解で何が間違ってるのかを、人に委ねちゃだめだよ。どうすれば自分の人生が良くなるかだけを考えなくちゃ。周りなんか気にしたところで何も生まれない。
山下 気楽でいいですね、あなたの考え。
尾崎 楽じゃないさ。結構大変だよ、自分で考えるのは。
山下 今からでも、できますか？
尾崎 まずはやってみることから始めるのがいいんじゃない？
山下 分かりました。やってみます。

少しの沈黙。

山下 ……尾崎さん。
尾崎 何？
山下 私なりに考えて、今やらなくてはいけないことが決まりました。
尾崎 おお、そうか。それは良かった。
山下 ですので。
尾崎 ん？
山下 手、放してもらってもよろしいでしょうか。
尾崎 もう逃げないよね？
山下 はい。逃げません。

尾崎は山下の腕を放す。

尾崎 それで、何するの？
山下 誠心誠意謝罪をしようかなと。
尾崎 そっか。たしかあの人、戻ってくると言ってたからここで待っていればいいんじゃないかな。
山下 でしたら尾崎さんに頼みがあるのですが。
尾崎 何？
山下 一度部屋を出て行ってもらってもよろしいですか？
尾崎 それは、どうして？
山下 お客様と話をする時私の誠意を見せなくてはいけないので。
尾崎 へえ、実際の所本音は？
山下 あなたに謝っているところをあなたに見られたくないからです。

尾崎 辛辣だなあ。じゃあ僕からもお願いがあるんだけど。
山下 何でしょうか？
尾崎 絶対に逃げないでほしい。
山下 ……分かりました。絶対に逃げません。
尾崎 上手くいくといいな。
山下 ……ええ。
尾崎 じゃあ僕は少しの間二階にいるよ。頑張って。
山下 はい。あの。
尾崎 どうした？
山下 ありがとうございます。
尾崎 お礼はいらないよ。

尾崎は二階に上がる。
山下は呪物を手にする。
すると、下手袖から戸を叩く音がする。

住職（声） おーい。受け取りに来たぞ。開けてくれ。

山下は下手に行き、戸を開ける。

山下 お客様。私の度重なる愚行、深くお詫び申し上げます。誠に申し訳ございませんでした。
女 開けてくださり、ありがとうございます。
山下 （顔を上げて）え？

山下は叫びながら引っ張られるような形で退場し、勢いよく戸が閉まる。
入れ替わるように上手から女将が現れる。

女将 おや。 山下さんと尾崎さんはどこへ？

戸が開き、下手から住職が現れる。

女将 ああ、今日も来たの。
住職 おい！ 外に出てないよな？
女将 出るも何も私、さっきまで寝てたのよ。
住職 そうか。ところで、あいつらはどこに行った？

女将 あいつらって、誰の事よ？
住職 スーツ着たガキと昨日ここで出くわしたガキだ。
女将 それがさっぱり分からないのよ。(上に向かって) 山下さーん！ 尾崎さーん！（と呼びかける）

しばらくすると、奥の扉が開き、尾崎が現れる。

尾崎 ああ、女将さん。体調は良いの？
女将 ええ。少し寝たらよくなったわ。
尾崎 そう。それは良かった。ところで、山下さんは？
女将 あれ？ 尾崎さんと一緒にいたはずよね？
尾崎 あー。さっき山下さんにお客様と大事な話がしたいから一人にしてくれって言われたからさ。自分の部屋で待機してたんだよね。そしたら女将さんの声の下から聞こえてきたから、てっきり話は終わったのかなと。
女将 そうだったの。私は尾崎さんと山下さんがいなくなってたから、もしかしたら二階に行ったかもって思って声をかけたのよ。
住職 （尾崎に）おい。
尾崎 どうしました？
住職 俺はスーツのガキと話なんてしてないぞ。
尾崎 え？ ちょっと、嫌な冗談はよしてくださいよ。
女将 山下さん、どこに行っちゃったのかしら。
住職 それに、ここに置いていた呪物も消えているのだが、それはどうなったんだ？
尾崎 呪物？ （指をさして）それならそのままにって。あれ？ ない。
女将 （尾崎に）呪物って何？
尾崎 （女将に）住職さんの大切なものらしくて、そのまま外に出すと危ないから置きっぱなしにしてたんだよ。
女将 そのまま持って帰ればよかったのに。
尾崎 ホントにそう思うよ。
住職 おい、何をこそこそ喋っている。
尾崎 申し訳ございません。さっきまではあったんですけどねえ。あはは（と愛想笑い）
住職 謝って済むなら警察はいらねえよ。
尾崎 はい、おっしゃる通りでございます。
住職 もしかして、またあのスーツのガキが盗んだんじゃねえよな？
女将 （住職に）盗むって、何のこと？
住職 あのスーツのガキが昨日俺の寺に置いてあったもんを盗みやがったんだ。
女将 え！ 山下さん盗みをやってたの！ 今すぐ警察に連絡しなくちゃ！

尾崎 (女将に) 女将さん落ち着いて。山下くんもちちゃんと謝罪するって言ってたから。
女将 駄目よ。すぐに対処しないと、きっと大変なことになるわ！ 尾崎さんもボーっと
してないで探しに行っちゃってちょうだい。
尾崎 え。僕、今日帰るんだけど。
女将 いいから！
尾崎 ……分かったよ。

女将と尾崎が去る。

暗転。

尾崎の声が下手袖から聞こえる。

尾崎 おい！ 山下くーん！ どこ行ったんだー！ おーい！

声は段々と聞こえなくなる。

終わり